



### 1 「孫子の兵法」と志能便

忍術とは何であろうか。文字ヅラからは忍者が使う術ともとれる。しかしここに述べるのは、レポート167号で述べたちゆうほう ぼうくわく ぼうりやく諜報・防諜・謀略・ゲリラ戦という日本の戦国時代に完成をみた具体的な忍術のことではない。今回はそのそもそもの始まりを論じて忍術の原点に触れていこうと思う。

忍術という言葉は中国にはない。これは日本固有の言葉であり、中国では「用間」として扱われている。しかし用間＝スパイではなく、中国における用間という言葉の意味するところは、人を使って機密情報を掴むことの重要性や、その思想や方法論を含む形で広義に亘っている。

中国での用間の歴史は長く、紀元前2400年頃にはすでに存在していた

と云われている。しかし残念ながら明らかな記録としては現存するものはなく、確認できるのはさらに2000年ほど待たねばならない。

明確な記録として残っているのは、紀元前500年～300年、中国の春秋戦国時代の頃著された『孫子の兵法』と呼ばれる木簡である。著者の孫武はそれ以前約2000年間の膨大な戦争記録を紐解いた。この木簡には兵法というより「将(人)としての行動の指針や対処法」が記されており、いまでも経営者のバイブルとして絶大な影響力を有している。その『孫子の兵法』の13章 用間篇では、用間について説いている。

孫武はスパイには5種類あるとしている。

- ①郷間…敵国の一般人をスパイに使う。
- ②内間…敵国の役人をスパイに使う。

- ③反間…敵国のスパイを味方に転向させて二重スパイにする。
- ④死間…味方のスパイに偽りの情報を教えたとえで、わざと敵に捕らえさせる。それを拷問した敵は、得られた情報を真実と思い込む。
- ⑤生間…敵国の情報を探ってきたスパイが生還後、その者から情報を得る。

では次に、將軍はどういう心得でいたらよいのだろうか。

- 将たるものは全軍の中で、用間とは最も親しく付き合い、恩賞も厚くしなければならない。
- 用間との接触は極秘裏に行なわなければならない。
- 人(用間を含む)を見透す智恵をつけ、用間を複数放ち多方面の情報を総合的に組み立てられなければならない。
- 仁義がない将は、用間を使いこなす事はできない。
- かすかな糸口から敵の虚と実を把握する能力がない将は、用間から真の情報を得ることができない。
- もし我が用間が敵によって発覚されたならば、その情報を知らせた協力者も共に殺され、こちらの情報も敵側に悟られていることの危機感を持つて用間を遣わなければならない。また、敵国人を味方の用間に仕立てるには、金の効力は大きい。みな理念より金を好むからである。国の経済力の差は、用間を使える能力と数の差でもある。



▲兵法書「孫子」は孫武の作とされる

これらは現代のビジネス社会にも当てはまる。企業の経営者にとって、業界の中で用間にあたるものを実施している。例えば自社の競争企業の下請け取引先、販売者、利用者などの声をよく諜報させ「人の振り見て我が振り直せ」と自覚し、また競争相手の社員の結束度、扱い商品、持っている技術等々の評判を収集する。「敵を知り己を知れば、百戦危うからず」の諺<sup>ことわざ</sup>にあるように、その情報により自社の方針等の臨機応変かつ迅速な軌道修正を行い、かつ反転攻勢をかける時機を見逃すことのないよう網の目を張っているのである。また、競争相手の新企画等々を諜報し、事前に対抗策を作成しておくことが企業経営に勝ち残る術であろう。

紀元前5世紀頃の中国では、孔子・孟子・老子・呉子・孫子などの諸子百家が輩出している。その諸子百家の中で孫武の著した『孫子の兵法』が、現代に生きる我々に大きな影響をあたえ続けている由縁は、それが経営哲学に通じるところが多いからと思われる。

では日本にこの孫子の思想がいつ頃、誰によって輸入されたのであろうか。公には平城京の時代の吉備真備<sup>きびのまきび</sup>(注1)とされているが、すでにそれ以前に非公式な形では輸入されている。文献によると、聖徳太子<sup>うまやどの おうじ</sup>(厩戸皇子574年～622年)が大伴細人<sup>おおともの さびと</sup>という伊賀の国人を志能便として諜報に使っていた。聖徳太子は推古天皇の摂政という立場であったので、いろいろな物事を即決しなければならぬ立場にあった。ある逸話に10人の訴を一度に即断したとある。この話は太子の聡

明さを示すために、後世の人が誇大な作り話として広めたものと云われている。しかし、志能便を常に側近<sup>つか</sup>にしておけば、世間の情勢は掴めていただろうし、その内容に対しても事前に探らせていれば、訴の内容に対する結論を準備できたはずなので、まんざら作り話とは言えない。1500年前でも、政治においてはいろいろな行政的決断に対し正確を期す必要がある。当時の民度を考えると、この即決力は確かに驚嘆に値するが、志能便を使って情報を先に掴んでいたとすればそれも可能と思われる。

蘇我馬子が仏教を日本に導入しようとしたのは、仏教を信仰する渡来人を取り込みそれに伴って彼らの大陸文明を取り入れるのが真の目的であった。これに対し、神道派の物部氏は大陸文明を取り入れられず、蘇我氏との戦いに敗れ滅亡の道を辿った。この戦いでは蘇我氏は明らかに『孫子の兵法』を理解した上での作戦で勝利している。聖徳太子も『孫子の兵法』を深く理解しており、聖徳太子は物部氏との戦いでもって用間(スパイ)の重要性を体現させた日本で最初の人物であった。この聖徳太子に智慧を与えたのが、戦国時代の四国の覇者長曾我部氏の祖先と云われる秦氏<sup>はたかわかつ</sup>、秦河勝(渡来人)である。

つぎに志能便を重く用いたのは、大海人皇子(後の天武天皇631年～686年)である。兄天智天皇の子大友皇子と戦った壬申の乱(672年)において、大いに志能便を使った。大海人皇子は諜報だけでなく謀略にも志能便を活用した。敵陣に志能便を潜り込ませて火煙を立てさせ、敵が大混

乱に陥ったところで機を逸さず夜襲をかけ、大友皇子の軍を破っていった。壬申の乱での大海人皇子の勝利は『孫子の兵法』の用間の術を積極的に取り入れたからである。その後の各武将は、この大海人皇子の用間を使った戦術を合戦の定石としていったのである。

## 2 奈良朝の忍術と山岳信仰

奈良朝は日本古来の神道文化と仏教文化が混交した時代である。前時代は蘇我氏と物部氏との宗教を介在しての権力闘争があり、それに神道文化と仏教文化に『孫子の兵法』(用間)が加わり、修験者が山伏の兵法として発展させた。この修験道の開祖と云われている人は、役行者小角<sup>えんぎょうじや おづね</sup>である。彼は舒明天皇の治世(629年～641年)に大和国に生まれた。役行者は大和国葛城山に入り、30数年山に籠って身体と心を鍛錬して、近代の忍者の原形をつくったとされている。

当時の豪族の戦いは戦国時代のような領土拡張戦争ではなく、仏教系豪族か神道系豪族かという宗教上の抗争と権力闘争が主流であった。この豪族の戦いは行基<sup>ぎんぎ</sup>(注2)(668年～749年)が「本地垂迹説」(神仏不二)を朝廷に具申し、聖武天皇に認められて国是となるまで続いた。その100年前、役行者小角は、神道・仏教を一つにする神仏不二の考えを行基に先駆けて布教しようとした。そのわけは、①神道は八百万の神として当時民衆には浸透していた。この世相は捨てがたい。

## 忍術の原点と孫子の兵法

②仏教は大陸からの渡来人が信仰しており、彼らのもつ先進文化も捨てがたい。

基本の教義は仏教であるが、旧来の神道も民衆の生活を向上させることにおいては同じであると説いた。しかしこの信仰はすぐには民衆に受け入れられなかった。そこで役行者小角は超越的な力を身につけることで、民衆を引きつけようと考えた。彼は山中に入り、精神と肉体を厳しく鍛錬した。その結果、気合術・催眠術・医療法の3つの技術を体得し(実は中国書物からの受け売り)、これを民衆の前で披露して信頼させ布教の手段とした。里に降りて民衆にこの奇蹟を示し、この靈力は神仏不二の信仰にあると説いた。民衆はこの靈力を受け入れ、たちまち神仏不二の思想は広まった。

しかしながら、朝廷・仏教系豪族・神道系豪族はこぞって彼を不逞な異端者として迫害してきた。朝廷は官兵を差し向け、小角を頭領とする修験者たちに戦いを挑んできた。こうして修験者は多数の官兵と戦うことになり、少数(いわゆる修験者)対多数(官兵)、すなわち小をもって大を討つ兵法を編み出していったのである。この山岳兵法は忍者の忍術として残り、神仏不二の信仰は行基が朝廷に具申することによって決着をみるのである。

### 3 山岳兵法の特色

修験者は官兵と山で戦うことが多くなり、山伏と云われるようになった。役行者小角とその仲間、中国兵法の応用に習熟していった。『孫子の兵

法』は中国の広大な大地で、数万の兵が一堂に会して戦う中で編み出された兵法である。日本のような狭い風土では『孫子の兵法』の手法では対応できない場面に遭遇することもある。そこで、山伏たちは徐々に中国兵法を日本流に変えていき、それを狭い場所でも使えるゲリラ戦法を日本固有の兵法として発展させていったのである。

もっとも大きな変形は、『孫子の兵法』には無かった武技が日本独自の兵法の技術として新たに取り入れられたことであった。また、『孫子の兵法』の中の用間の術が部分的に山伏によって強化されたこともある。すなわち彼らが編み出した武術が、日本固有の武術として確立し始めたのである。『孫子の兵法』の用間術に日本の謀略(特に破壊工作)戦が、中国拳法(例えば少林寺拳法等)を超越するまでに発展したことは注目に値する。すなわち広大な中国とは異なる日本の風土では、はじめから兵法(戦術)、用間、武術(各個人の殺人技術の巧拙)が三位一体でなければ、戦いに勝てなかったからである。中国兵法は戦争だが、日本では戦闘であった。

2~3百人の山伏が、数千人単位の討伐軍と互角に戦うには、一人ひとりがゲリラ戦で挑む必要があった。この時から少しずつ山岳兵法が忍術として形成されていくのである。山伏は鋼鉄という素材による武器ではなく、金剛杖という一本の棒を用いて払い・打ち・跳ね上げ・突くという棒術を編み出した。これは中国の広大な大地において練り広げられる兵士同志の集団戦とは一線を画すものである。山伏は常に絶対多数の官兵と戦わなけれ



▲修験者は官兵と山で戦うことが多くなり、山伏と云われるようになった

ばならなかったゆえに、謀略手段をつかうゲリラ戦を得意とした。

このように、忍術という技は誰かひとりふたりが開発したものではなく、長い歴史の中で日本固有の個人武技として編み出され発展したのである。このたびは誌面の都合上奈良朝までの忍術の歩みに触れたが、平安期・鎌倉期・室町期・戦国期と忍術は少しずつ姿を変え発展していくのである。機会があれば平安期以降の忍術の歩みに触れていきたい。

- (注1) 吉備真備…695年生まれ、775年死去。716年遣唐使として中国に渡り18年間、留学生として学ぶ。後に従二位右大臣まで昇進し、東大寺造営の長官となる。学者で右大臣まで出世したのは、菅原道真と吉備真備だけである。  
(注2) 行基…聖徳天皇により、東大寺の大僧正(僧の最高位)に任命された。

(参考文献)  
「忍者の歴史」 山田雄司 角川選書  
「忍者の歴史」 上野市観光協会

(2018.2.6)

OKB総研 特命研究員 三矢 昭夫